

## 説話を読み解く

## 説話を読み解く

## ——宇治拾遺物語の戦略——

小島 孝之

講演ということなんですけれども、昨年・一昨年と、ご退職になった後藤昭雄先生と工藤力男先生は共に、この会で最終講義の代わりということでお話になったんですが、私は最終講義ではなくて研究発表のつもりで話をさせていただきます。

とは申しながら、実はこのところ、たいへんあわただしくしております、こちらの準備をする時間がほとんど無かったのが実状で、レジュメも実は昨日作りまして先程プリントしたというようなことですので、ちょっと材料不足といえますか、十分な準備ができなかったというところで、大変申し訳なく思っております。

で、「説話を読み解く」と題しましたが、要するに説話を読むということです。一体どういう風に読んだらいいのだろうかということをずっと考え続けてきた訳ですけども、最近説話研究の方向が違ってきまして、思想研究とか、国際研究とか、そういう方向に行っちゃったんですね。私がやりたいような方向で物を考えている人

がほとんどいなくなったという状況があるので、私はもう一回世の中の潮流に逆らって、自分の原点に立ち戻って考えてみようとしているのです。あわよくば現代の説話研究に新風を吹き込んでやろうという野心がないわけでもない。ということで大風呂敷を広げましたが、それにしてはちょっと雑駁なお話になってしまおうかなと思います。意欲だけはそういうことで、少し考えていることをお話ししたいと思います。

まずレジュメのひとつ目に書きましたのは、「説話の多義性」ということです。説話の解釈というのは実に多義的であって、なかなか一元的に解釈できるものではないということだと思っうんですね。

説話というのは、日本では大きく二つの潮流があるわけでした、一つは仏教説話といわれるものです。こちらは割合に単純といつては語弊があるのですが、目的がはっきりしているわけです。仏教の布教という目的があるので、最終的にはその目的に収斂していこうとする、そういう方向性があるわけです。他方に仏教とは関わりのない世俗説話と言われるものがあります。世間話みたいなものであったり、昔話みたいなものであったりするわけですが、これは一体何を目的にしているのかという実によく分からないんですね。

こういうよく分からない説話の方についての研究が、少なくともできていてというように思います。分かっているようで分からない、という例を、皆さんが高等学校の教科書なんかでご覧になったような話をまず最初に取り上げてみたいと思います。

例一、『宇治拾遺物語』の第十三話、「田舎の稚児、桜の散るを見て泣くこと」という短い話を取り上げてみます。これは、教科書によく採られている文章です。そして、大学の入試問題なんかでも使われることがあるもの

で、短いながら、なかなか味わいのある話ということになっているんですが、実はなかなか手強いというか厄介な話でもあるわけです。

これも今は昔、田舎の稚児の比叡の山へ登りたりけるが、桜のめでたく咲きたりけるに、風の激しく吹きけるを見て、この稚児、さめざめと泣きけるを見て、僧の、やはら寄りて、「など、かうは泣かせたまふぞ。この花の散るを惜しうおぼえさせ給ふか。桜ははかなき物にて、かく程なく移ろひ候ふなり。されども、さのみぞ候ふ。」と慰めければ、「桜の散らんはあながちにいかがせん。苦しからず。わが父<sup>て</sup>の作りたる麦の花散りて、実の入らざらむ、思ふがわびしき。」と言ひて、さくり上げてよよと泣きければ、うたてしやな。皆さん充分お分かりだと思いますが、これをなぞりながらお話ししますので、イメージを浮かべながら聞いてください。

田舎の稚児が比叡山に登ったとあります。稚児というと、まだ本格的なお坊さんになる前の少年、前髪を垂らした少年ということになります。その上で、この説話の外側の知識といえますか、常識として稚児とはなんぞやということを一応念頭に置いておく必要があると思います。

稚児というのは少年がお寺に入って、行儀見習いのような形で様々な知識、教養を身につけていきます。勿論、お寺の中の様々な用事をしながら、仏教の初歩を学んでいくというを行います。ところで、お寺はご承知のように、女人禁制です。つまり、女性関係というものが基本的に禁じられているわけですね。ところが、不思議なことに日本では稚児を対象とする男色が認められている。禁じられていない。

『千夜一夜物語』を英訳したリチャード・パートンという人によると男色文化帯というのが世界中にあるんだ

そうですが、日本もその中に入っているということです。特に中世はですね、男色というのがかなり大つぴらに認められていた時代だとふうにいつていいと思います。従って、お寺の稚児の中に可愛い少年がいれば、これは坊さんたちの良い標的になるといいますか、和尚の寵愛する対象にもなるということになりますから、もしかするとこの少年は美少年だったのか、或いはその逆なのか、どちらか分かりませんが、そういう雰囲気は頭の隅に置いておく方がいいということです。

さて、その田舎出身の稚児が、比叡山に稚児として修行に登ったわけですが、ある時「桜のめでたく咲きたりける」とあります。

桜が美しく咲いている情景というのがあるわけですね。ところが、「風の激しく吹きけるを」というので、激しい風が吹いているということは、桜の花びらが散っているということを書いてはありますが、当然前提ですね。それを見て、「この稚児、さめざめと泣きける」と、泣いているわけです。普通の人は、桜の花が散るのを見て泣きはしないと思うんですね。ですから、さて一体何故泣いているのだろうっていう疑問は当然ながら、そこにいる人間には起こるはずですね。泣く理由は様々あるはずですが、そこに坊さんが登場してくるわけです。

「僧の、やはら寄りて」とあります。やわら登場するわけですが、さて、この僧は一体どういう僧なんだろうかということがあるわけですね。『宇治拾遺』の様々な注釈によると、つまりこの僧はこの稚児に対して先程言いました男色の関係にある、ないしはそういう意図を持っている僧だったのではないかというように見ている人もいます。直接に書いてはありませんからわかりませんが、想像の範囲内でそういう可能性はあると思います。

で、この僧は「花の散るのを惜しんで泣く」というひとつの解釈をするわけです。そして、慰めるわけですね。「桜は儚いもの、すぐ散るものだ。しかし、そういうものだから、やむを得ないのだよ」ということを言っているのですけれども、坊さんの世界ですから、これは世の無常の理ですね。咲いた花は散るものである、生きるものはいずれは死ぬものである、というように、いわば無常の理のひとつとしてこれを解釈して、教訓をかねてこの少年を慰めようとしているのだろうと思われます。

それに対する稚児の対応ですが、「桜の散るのをどうこうすることはできない」と言うんですね。「桜の散らんはあながちにいかげせん」。無理矢理どうこうしようたって、どうにもなるもんじゃありません。だからそんなことは言っても仕様がないうですね、だから落花など悲しんでいないということになります。そうだとすると、この僧侶の慰めは全く見当違いだったということになります。

で、「わが父の作りたる麦の花散りて」。つまり、この場のことではないんですね。「故郷で、自分の父親が作っている畑の麦の花がこの風で散ってしまつて、今年は麦の実がならないなあ」ということなのですね。収穫がない、収穫がなければ当然、不作ということとで父親は生活に苦しむことになります。それを考えて、「思ふがわびしき」と言っています。僧侶の考えた風流とか無常とかということとは全く無関係な、いわば生活者の感覚でこの稚児は答えているということになります。

最終的にこのちぐはぐなやりとりに対して語り手が「うたてしやな」というふうに述べているわけです。

ここまでの粗筋の解釈については、細かいことは別にして、従来の注釈書でさして違いがあるわけではありません。

せん。決定的に問題になるのは、この最後の「うたてしやな」です。この意味がよくわからないですね。何に對して「うたてしやな」といつているのか。「うたてしやな」をどう訳したらいいか。これは恐らく注釈書によって様々に意見が割れるところだろうと思います。

レジュメにこれを「うたてし」の解釈の揺れと私は書きましたが、様々な意見を大雑把に分けると、以下に挙げてある1、2、3の三通りぐらいに分けられるのではないかと思います。本文に「さくりあげて、よよと泣きければ、うたてしやな」というので、稚児が泣いていることに對して、「うたてし」と評しているのだと、素直にこの文章の流れに沿って解釈するのが、多くの注釈だと思えます。いわば、風流を解さない稚児の田舎者のな反応に對する、語り手から見た非難ですね。不快感がこの「うたてしやな」という言葉で表明されているのだというふうに解釈する説が多かったというふうに思います。

それに対して、僧が、風流とか無常とかという方向からこの事態を解釈しようとしていることに對して、稚児は全く違うことを考えている。この二人の意識が完全にすれ違っている、どこにも接点がないのですね。そのことについて語り手は「うたてし」と言っているのだという解釈です。意識のすれ違いに對するあてこすりの表明と言ったらよいでしょうか。

三つ目は、その稚児が、真心から自分の父親の心配をしている、稚児は稚児なりに真剣なことを考えて泣いているわけですが、それに對して一方的に僧侶の方が、「桜の散るのを悲しんで泣くのだ」と、風雅な方向から当て推量で慰めている。言ってみれば、僧の考え方はある種の定型化した考え方、パターン化した思考です。それを語り手が茶化している、と見るのです。僧侶に對して、茶化したりからかったりする意識で、「うたてし」

と言っているのだという穿った解釈もあるんですね。

さて、この三つの中で、どれが正しいのかということになると、なかなか決め手がないように思います。文法的に解釈して、結論を出せるかという点、どうも難しいような気がします。つまり、その後に書きましたように、「一元的に解釈できる根拠」というのは、一体何処にあるのだろうか。どれが正しくてどれが間違っているということをはっきりと断定できる根拠があるのかということですね。非常に難しいだろうと思います。従来の注釈書は、何かしら書かなければなりませんから、そういう曖昧さを残した上で、その注釈書なりの結論というものを書いてあるわけですが、自信を持って結論を書いている人がどのくらい居るのかとなると、かなり疑問なのではないかと思っております。

これは、たまたまここがそういう分かりにくい言葉だったというのではなくて、私はむしろ、作者、語り手は曖昧な、どちらとも取れるような書き方をしているのではないかと。つまり、最初に表題に「戦略」と書きましたが、つまり、語り手の戦略としてこういう方法が取られているのではないかというふうに考えているのです。

『宇治拾遺』の説話の中で、こういうどちらと取ったらいいのか分からないような、文言が付されている話が多いということが出来ます。

たくさん例を挙げればよろしいのですが、冒頭に申しましたような事情で時間的な問題があって、ひとつだけに限定させていただきます。

例二で、「不浄と神の関係の解釈」として、『宇治拾遺物語』の冒頭話、巻頭第一話を挙げました。「道命阿闍梨、

和泉式部のもとにおいて読経し、五条の道祖神聴聞の事」という題がついております。

因みに、この標題は後世付けられたものです。『宇治拾遺物語』の古い写本に標題は付いておりません。これは、版本で付けられた題名なのです。そういう版本に対して、古本系といわれる本（古本といってもそんなに遡るものでもありません。一番古い本がはたして室町まで上れるかどうか、江戸かもしれない、という程度のものです。古く見積もっても室町の末ぐらいという訳ですから、版本とそれ程時代が離れているわけではないのですが、いわゆる古本系と呼ばれる本が何本かございます。）そこには一切標題は付いておりません。

で、この標題を丹念に見ていくと分かるのですが、内容を正確に把握していない、あるいは明らかに内容を誤読しているんじゃないかと思えた題なんかもついているんですね。ですから、これは恐らく版本を作る段階になって新たに付された題であるというふうに考えてよろしいのかと思います。

話を本題に戻します。説話の内容はここではこの標題に短く要約して書かれております。

この話に入る前に、まず登場人物を、前提として把握しておきたいと思えます。ここでは二人だけ、道命阿闍梨と和泉式部という二人だけですが、ご承知だと思いますが、簡単に述べておきます。

道命阿闍梨と言う人は、藤原道綱という人の息子です。藤原道綱と言いますと、あの『蜻蛉日記』の作者（道綱の母）の子。母の名前が分からないので、道綱は道綱の母の子ども、という妙なことになりますが。つまりお父さんは藤原兼家という道長の父です。いわばあの絶対権力を握った藤原氏全盛期を作った人ですね。その息子です。天皇寺別当などを歴任しまして、最終的には官職としては阿闍梨ですが、歴としたお坊さんです。読経の



名手として大変よく知られております。最近、「読経道」などという言葉が学術用語として作られたりなんかしていて、読経の流派みたいなものがあつたというようなことが明らかにされてきておりますが、お経を節付けて美しい声で読むという、読経の名手として、最初に名前が挙がる人と言いますか、その元祖のような人でございます。

この人のことは『本朝法華験記』という書物に詳しい説明が出て参りますが、ここでは法華経持経者として、賛美の対象として登場して参ります。法華経持経者というのは、数あるお経の中でも、特に『法華経』を最も優れたお経と考えて、専らその『法華経』を説誦することを自分の修行にするお坊さんです。この『本朝法華験記』には、ここに書いてあるような、こんな妖しげな話は一切書いてありません。大変素晴らしい高僧として説明されているわけです。

『今昔物語集』が、その『本朝法華験記』の話をほぼそのまま引き継いで、道命のことを書いておりますが、そこではもうちよっと『法華験記』よりも詳しくなっております。基本的には、素晴らしいその読経を聞くために、神々が聴聞にやってきたというお話が書かれております。金峰山の蔵王、熊野権現、住吉大明神などといった神々が、読経の場に來臨したと書かれています。そして、こういう神様が、道命の読経は大変素晴らしいと墨付きをくれたというふうな話になっているわけです。

ところが、平安末期から鎌倉の初期にかけて作られた『古事談』という説話集において、一転して違う側面が語られることになります。それがこの『宇治拾遺』説話の原拠であります。ですから、基本的に『古事談』に書かれている話と、この『宇治拾遺』の冒頭の話はほぼ同じ話であるというふうに考えてもいいわけです。（「宇治

拾遺物語』というのは、『古事談』を出典として仰いでいる話をかなり沢山収録しております。つまり、『宇治拾遺』の作者が使った種本のひとつが『古事談』であったというふうに考えていいと思います。)

そこで、『古事談』を見ると、「好色無双の人」というふうに記述されています。これがほぼそのまま『宇治拾遺』に移される形で、ただ少し言い方が変わって、「色にふけりたる僧」というふうに言い換えられているわけです。僧侶として大変不名誉な言い方になりますが、これは決して、最初からこういう評価だったわけではありません。平安から中世に時代が変わるにつれて、全く評価が変わってきたということでもあります。

他方、その相方の和泉式部ですが、こちらでも大変有名な人ですから説明の必要は無いかもしれませんが、お父さんは越前守大江雅致という人。和泉式部自身の生没年は分かりませんが、大体二十歳の頃に和泉守橘道貞と結婚したと言われております。和泉式部という名前もこのへんに由来があるだろうと考えられるわけですね。

道貞との間に女の子を一人産んでおります。これが小式部内侍と後に言われる人になります。

ところが、冷泉天皇の皇子である為尊親王という人と熱烈な恋に落ちまして、道貞とは離縁することになります。離別されます。父親の大江雅致も大変怒りまして、娘を勘当してしまおう。ところが、為尊親王はまもなく死んでしまおう。すると、今度は弟の敦道親王が通ってくるようになって、この敦道親王の奥さんが離縁しちゃおう。フリーになった二人が結婚することになります。そのあたりは『和泉式部日記』という作品に書かれています。『和泉式部日記』は果たして本人が書いたものか、後世の人が作ったものかと、意見が割れておりますね。最近では自作説が有力なのでしょうか。)

この敦道親王も早くに亡くなってしまい、また和泉式部は一人になってしまおう。そのうち、寛弘六年頃に一条

天皇中宮彰子の下に出仕することになったらしいということです。そして、あの、一条天皇中宮彰子の下には紫式部も仕えておりますし、大江家の一族としては、赤染衛門という人も仕えていたわけですが、和泉式部はそう永く、中宮彰子に仕えていたわけでもないらしくて、二年ほど後に藤原保昌という人と再婚をしている。

保昌もまた、「大江山いくの道の遠ければ」という百人一首のお話でおなじみですが、地方官を歴任しておりまして、和泉式部もその夫の保昌に同行して地方に行っているらしい、ということですが。文献記録上は五十歳頃の記録が最後で、以後記録から姿を消してしまうので、それから間もなく出家したのではないかと、そう長くない後に亡くなったのではないかと言われておりますけれども、よくわかりません。

和泉式部は、今申し上げたように、為尊親王、敦道親王との恋というようなこともあって、恋多き女と言われるわけですけれども、これまた、平安末から中世になりますと、大幅に、伝承の味が変わります。遊女に身を落としたとかですね。これは、栃尾先生がなさった『玉造小町子壮衰書』と似た話ですけれども、玉造小町とか、小野小町が晩年零落したというのと同じように、和泉式部は晩年零落して遊女になったなどという零落説話みたいなものが作られていきます。

道命も和泉式部も、当人が生きていた時代には、勿論そういう評価は全くなかったといっていると思います。『宇治拾遺』の説話は全く架空のことです。この二人の関係を直接語る説話というのは、中世に下ってくるまでないのです。平安末から鎌倉の始め頃になって作り出された話なのだろうということになります。

この説話がどうして作られたのかということ自体、色々面白い問題があつて、それ自体また研究の対象になると思いますが、今回はその点には触れないことにしておきたいと思います。

もうひとつポイントがあります。標題に出てくる道祖神です。道祖神とは何であるか、ということも一応前提として知っておかなければいけないと思います。

普通道祖神として祀られているのは、陰陽石、男女結合像というようなものが多いということです。安曇野とかが行きますと、道祖神が観光スポットとしてたくさんありますが、そこにはこんなエッチな像は無いんですが、実際にはこういうのが大変多いのです。この近所にもありまして、上野の不忍池の中に弁天様の神社がございますが、その裏手に行くと、池のほとりに道祖神が祀られていて、誠に見事な陽石なんです。

私が昔、学生時代に、アルバイトの予備校で一夏、野辺山温泉というところで過ごしたことがあるんですが、その温泉の守り神みたいな神社が山の中腹にあるんですけれども、その参道の門のところに、陰陽石が祀られている。村のお祭りにはその神様が登場するらしいのですけれども、その祭りの方は残念ながら見たことがありません。

道祖神の多くは石神、石像神です。石神っていうところから「せきじん」と読み、これは「しゃくじん」であるとか言われます、このへんは柳田国男が、『石神問答』で先鞭を付けましたね。最近だと中沢新一さんが『精霊の王』というなかなか面白い本を書いております。

一方で、この道祖神というのは「塞の神」であるとも言われている。『今昔物語集』には、何話か道祖神が出て参りますが、それ見ますと、病厄神―つまり疫病神―などに使役される下級の神様である、一番下っ端の神様として登場してきます。現実には道祖神というのは、村里の境で厄払いに当たる。共同体の境に置かれていることが多い。峠に置かれる、あるいは川岸に置かれる等々、いわば共同体の境界に置かれることが多い。そこから、

行路を守る、行路神として信仰されることもあります。旅の安全を守るといふ神です。

一方で、先程申しましたように、陰陽石というところから、遊女が祀る性神としての性格もございます。非常に民間信仰と密接に関わる神様でありまして、日本文化にとつて道祖神とは何かというのは、なかなか厄介な問題で、大変深い問題があると思いますが、そこに今踏み込むのはやめて、ここで取り敢えず押さえておきたいのは、神様の階級としては一番下級の神様であるということ、一番下つ端の神様なんだということですね。それがこの話では重要な要素になっております。

さて、それでは本文を見ていきたいと思いますが、「今はむかし、道命阿闍梨とて、傳殿ふだのの子に、色にふけりたる僧ありけり」。「傳殿」っていうのは、お父さんの道綱のことで、傳の大納言といわれましたので、「傳殿」と呼ばれます。

「和泉式部に通ひけり」と、もういきなり道命と和泉式部が男女関係にあるということが、当たり前のように、みんな知ってるだろうという感じで前提として書かれています。「経をめでたく読みけり」。読経の名手ですから、これは当然ですね。

それが、「和泉式部が行きて臥したりけるに、目ざめて、経を心をすまして読みける程に、八巻読みはてて、曉にまどろまんとする程に」というので、夜中に起き上がって、やおらお経を読んだ。心を澄まして読んだ。『法華経』八巻、全巻読み終わったんですね。そして、曉にうとうととしておりますと、「人の気配のしければ」、何か人がいるような気配がする。そこで目が覚めるわけです。

「あれは誰れぞ」。お前は誰だ、と聞くわけですが、「おのれは五条西の洞院のほとりに候ふ翁に候ふ」と答えた。「私は五条の西の洞院の辺りに住んでおります爺でございます」というふうに名乗ったんですね。西の洞院の辺りにいる爺さんとは一体何であるか、ということになります。これだけでは分からないわけです。勘の良い人は分かるかもしれないけれども、普通は分からないはずですよ。

これまでの研究によりますと、五条の西の洞院には、五条天神とそれから五条の道祖神というものが、筋向かいに祀られていたと言われております。それから、「翁に候ふ」とある。「翁」つまり老人ですね。説話のみならず、様々なところで、神様が具体的な姿をとって現れるときには、基本的に老人として出現して参ります。ですから、ここは読みようによつては、もうこれで、五条に祀られている神様だっていうことが、勘の良い人には分かるということですよ。ただ具体的にはそうは言っていない。

「こはなに事ぞ」と、「一体なんであんたがここへ来るんだ」と聞くわけですが、「この御経をこよひ承りぬる事の、世々生々忘れがたく候ふ」。「このお経を、今晚あなたが読みになるのを、聞くことができましたのは、生涯忘れられないことでございます」というふうに言ったわけです。「と言えければ、道命、『法華経を読み奉ることは常の事なり』、『法華経を読誦するなんてことは私にとつては日常のことであつて、毎日やっていることです』と、何で今日に限つてそんなことを言うのか、というふうに質問するわけですが、すると、ここで、「五条の斎曰く」と、もうここでは「五条の斎」と正体を明かしています。先程の五条西の洞院の辺りにいる老人というのは、五条に祀られている道祖神であるということをご自身名乗っています。

清くて読み参らせ給ふ時は、梵天・帝釈をはじめたてまつりて、聴聞せさせ給へば、翁などは近づき参りて

承はるに及び候はず

貴方が身を清められて読誦をなさる時は、梵天・帝釈をはじめとする偉い神様たちが聴聞においてになるので、私のような下っ端はととても近くでお聞きするようなことはできません。「今宵は御行水も候はで、読みたてまつらせ給へば」。今日は行水もなさらず、身を清めることをしないでお読みになったので、「梵天・帝釈の御聴聞候はぬひまにて」、梵天・帝釈というような偉い神様は、そんな不浄な聴聞は聞くわけにはいかんと言つて、来なかつた。それでちょうど、人が少なくして私は側に来られたんだ、ということと言っているわけです。「翁参り寄りて承はり候ふことの、忘れがたく候ふなり」、お近くでうかがえて、こんな有り難いチャンスはありませんでしたというふうに、感謝をしたということになります。まことにこの話も面白いのですが。「されば、はかなく、さい読み奉るとも」。実はこの「さい」が意味がよく分からない。今まで誰もこれを解釈できていません。なにかの間違いではないかというように言われたりもしていますが。この「さい」はわかりませんので飛ばして読みます。

「されば、はかなく」、ちよつとしたことで、読み奉るとしても、「清くて読み奉るべき事なり」。身体を清めて、お読みするべきである。

念仏、読経、四威儀を破る事なかれと、恵心の御房も戒め給ふにこそ

「念仏読経四威儀」とは、立ち居につけてということです。日常様々な行為につけて、威儀を破ることなかれと。定められた戒を破つてはいけなさと、「恵心の御房」ですから、源信です、源信も、そのように戒めていらつしやるぞというお話です。

さて、この話の構成をもう一回なぞってみますと、道命の場合、「色にふけりたる僧」というふうにはまず紹介されます。つまり、高僧であり、かつ好色の僧であると。そして、和泉式部と関係しているということで、簡単にいえば、破戒僧であるということです。

この破戒には実は二つの意味があるわけです。一つ目は、まず女色、女犯という破戒がある。二つ目には、不浄の読経という、身を清めないで読経をしたという破戒。いわば二重に破戒行為を行っているということになります。

そこに相方として五条の斎が登場してくる。これは塞の神。先程申しました道祖神です。読経聴聞の礼を述べるということで、読経の功德が一応賛美されているということになりますね。道命は、「読経は常のことだ」と、言うんですが、五条の斎は云々ということで、後は先程述べたようなことになっております。

さて、この説話の意義付けというのは、一体どういうことになっているのかということになります。

女色を非難しているのでしょうか。どうもそのようには書かれていないですね。特に非難するようには見えない。でも、決して褒めているわけではないですね。なかなかこの女色ということについて、どういうスタンスなのかよくわかりません。もう一方の読経の功德、これは明らかに書かれておりますね。清くて読経すれば梵天・帝釈といった偉い神々が来ますし、こういうふうの不浄で読経すれば、塞の神がやってくるということになって、功德があるというのわかります。

さて、最後にその四威儀を破るなというこの恵心僧都の言葉というのを引っ張り出してきた時に、これは一体、この四威儀を破るという行為はここではなにを指しているのだろうか。彼のその女犯という行為を指しているの



だろうか、あるいは不浄の読経を指しているのだろうか。批判しているのか、擁護しているのか、なかなか分かりにくいですね。

一方に断定し切れないところがある。語り手はむしろ、そのように断定できないように語っているのではないのでしょうか。つまり、ある一定の価値観で切り取らずに、わざと読者をはぐらかして、そのことで笑いを生み出しているのではないかと思います。

今、例として二話しか挙げませんでしたけれども、説話の連鎖性ということ、従来問題になっていることに、ちょっと触れておきたいと思います。『宇治拾遺物語』の説話の連鎖の意義ということを最初に述べたのが益田勝美氏の「中世的風刺家のおもかげ」という論文です。<sup>(1)</sup>

この論文は、従来ある程度は気付かれていた『宇治拾遺』各説話間の連想性を指摘して、説話を繋ぐものを「連想の糸」と呼び、その結び方に現れる作者の価値観について、「権威を知らぬ男」、「ヒューメンな側面」、「流動する精神」などという評価を取り出したのです。

益田さんが直接検証したのは、冒頭の八話までですが、これを受け継ぐように三木紀人氏の「背後の貴種たち——宇治拾遺物語第十話とその前後——」という論文が発表されました。<sup>(2)</sup>

益田さんが取り上げたのは巻頭第一話から第八話までですね。ここで益田さんが何を言っているのかというと、第一話は、益田さんはこれをプラスの価値観というふうに読み取っているのです。坊さんの読経には大変功德があるというのが第一話の趣旨であると読み取ってプラスに評価する話だとしている。

ところが、第二話は、不浄説法する坊さんがキノコに生まれ変わるという話で、隣り合う話同士で語り手の価値観が逆転していく。右だと思ったら次の話では左。左だと思ったらその次の話でまたは右というふうに、価値観が全く正反対な方向に交互に振れていくのであって、『宇治拾遺』の作者というのは、価値観を一元的に結論づけるものではないと言います。その点を、むしろ自由な精神とか、複眼的な批評精神として評価していこうというのが益田さんの論文の狙いだったわけですね。

ところが、そういうその語り手の批評精神のようなものを読み取ろうとする益田さんが持っていた視点が、その後を追う論文からは消えて行ってしまうのです。むしろ、その「連想の糸」という方にみんな注目しちゃうわけなので、この話とこの話はどういう連想で繋がっているんだ、というそちらの探求にみんな行っちゃったわけですね。

そのきっかけを作ったのが三木さんの論文だと思うのです。三木さんの論文もなかなかインパクトのある論文なんです、「背後の貴種たち」とサブタイトルにありますように、作品を普通に読んでもその連想関係がわからない第九話以降の数話について、そこに書かれている人物たちが実際にどういう人たちであったか、どういう立場の人たちであったのか、どういう立場から行動を取った人物であるのか、という、実はその時代の人々ならば分かる、事件の背後関係を見ると、実はこれらの説話も連想的に繋がっていることが分かる。一見何の関係もない話が並んでいるように見えるけれども、実は分かる人には分かる形で繋がっているのだということを示した論文なのです。ですから、繋がっているってことの意義を強調する形なので、益田さんが語り手、作者の価値観というように触れたところは完全に抜け落ちてしまったわけです。で、その後の小出素子氏の論文『宇

『治拾遺物語』の説話配列について――全巻にわたる連関表示の試み――<sup>(3)</sup> というのはまさにそれなのです。全話ですね。第八話までを益田さんがやったので、三木さんはその次の第九話から後ろの数話を取り挙げた。それで、小出さんは全話を繋ぐわけです。これとこれはこういう関係がある、これとこれはこういう連想で繋がっていると、いうふうに百九十七話の全てに渡って、連関関係というのを指摘している。その連関表なんていうのを拵えているのです。なかなか面白い。確かにそういうふうにも読めるだろうと思います。

その連想の在り方については、いやこはこういう連想なんだろうとかですね、その連想の中身を少し読み替えていくような、そういう論文はこの後も続くのですけれども、それで、ある程度みんな繋がってるんだってことが分かったらそれで終わっちゃったわけなのです。『宇治拾遺』の構成を考える研究というのは、そこでストップしてしまっただけ。

私はそれが非常に残念なんです。益田さんが提起した、中世的風刺家といった語り手の物の見方、思想、それが作品構成の中にどう表れているのかというところを捉えてみたい。あるいは、捉えなきゃ面白くないじゃないかというふうに思うのです。

で、先程申し上げた、益田さんがここを具体的にどう指摘しているかというのを、やや抽象的にまとめた文章を拾い出してみると、レジュメに挙げたようなことが述べられているわけです。

「書かれてきている話を、（これはつまり、伝承されている、書承されているっていう意味だと考えていただいて結構だと思いますが――小島注）、興味を感じて物語っておきながら、語り終わると、それと全く反対の価値基

準で支えられてきた逆の志向性を持つ話をぶつつけていく。彼は説話のそれぞれの系列がそれぞれに擁護してきた、伝統的価値を認めないらしい。」つまり、伝統的にある話に付けられていた意義、これはこういう話なんだという読みを認めないのだということを言っているわけです。

「不浄にも関わらず尊い、（これが今の第一話の益田さんのまとめですね。この道命の話は、不浄にも関わらず尊い）という話と、（二つ目の話）不浄破戒は必ず報いを受ける、（これはあの、キノコに生まれ変わっちゃうという話ですね）という話をつないでいる。」

「〈説話文学における中世〉の到来は、ただひとつの状況に抵抗したり、ひとつのきまりきった対象に諷刺の矢を向けていくのではなくった点からも、感じとらねばならないように考えられる。ひとりの人間が相手どる悪しき權威の壁は複数化した。主体の批評の目も複眼化し、より自由なものに成長していった。」と述べている。

「自由なものに成長していった」っていう辺りに益田さんの時代性というのが感じられます。もともと、マルキストであった益田さんの面影が何となくここに残っています。これはやっぱり今このまま通用するとは思いませんけれども、ただこの視点は、私は非常に重要だと思っています。

そういう方向でやる人が、あまりいない中で、最近、若い人でちょっとそういった方向に合うような形で、『宇治拾遺』を論じている人がいるので、取り上げてみました。野本東生という人が、「宇治拾遺物語第九九話「大膳大夫以長前驅之問事」考」<sup>(4)</sup>という論文を、発表しております。

今の問題にやや合致するところを取り上げますと、「よく似た型を持ちながら、（中略）同じ評語を持たせ、同

じ型を供するものでも、そこに少なからず含まれる差異に『宇治拾遺』は自覚的である。」というふうに言っています。つまり、隣り合う話、野本氏がここで取り上げているのは、瘤取り爺さんの話と舌切り雀の話が二つ並んでいる所ですけれども、同じ評語があるとか、型的にいつても同じであるが、しかし、そこには本質的には、かなり違う意味があるのだということを述べてきた、そのまとめとしてこのような文章で出てくるわけですが、『宇治拾遺』はそれを自覚的にやっているのだということを述べております。

あるいは別の箇所で、野本さんは「類似の型並びに冒頭文の一致や末文の一致が、類似の読解を結ばせるわけではない。」とも言っています。冒頭の文が同じだから、あるいは結びの文が同じだからといって、同じ解釈をすればいいというわけではない。「それは安定的な型通りの読解を拒む『宇治拾遺』の姿勢に合致するところである。」というように彼は述べております。「類似の型から類似の主題を見出そうとする態度へのいざないと破綻、それは連続・連鎖・連想という読解方法と裏返しの関係にあるのではないだろうか。」

ずっと続いてきたその連想・連鎖という考え方が、ようやくここで、そうでない読み方をすべきだということ意図が出てきたんじゃないかというふうに思います。私もそのように考えるのです。

『宇治拾遺物語』というのは、一見、脈絡のない話が雑多に並んでいる。あれを、雑纂という言い方がかつてありました、西尾光一さんという人が、いやそうではなくて、あれは連纂というべきだと、一応連続する意味があるんだというふうなことをいわれています<sup>(5)</sup>。

その連続性とか、一見雑多に見えるものが実は連続しているということを証明しようという方向にみんなどうも注力してきた。それはそれでいいと思うんですが、連続性が証明できればそれでいいわけではないので、そこ

には一体どういう意味があるのか、一体何を思って、作者はそういう連続した話を置こうとしているのか、というそっちの方を考えなくちゃ面白くないんじゃないかというふうに私は思っているわけです。

『宇治拾遺』と非常に近いのが『古事談』なんです。『宇治拾遺』は『古事談』を種本のひとつとして、随分たくさん『古事談』から話を取ってきているのです。

『古事談』という作品自体が『宇治拾遺』と非常に良く似た傾向を持っている作品なのです。私はそのことを「王権のトボロジ―」『古事談』第六亭宅篇試論<sup>(6)</sup>という論文で、平成六年に書きました。これは、『古事談』というのは全部で第六卷まであるのですが、その最後のところが亭宅篇というのになっておりますけれども、その亭宅篇というのは一体どういう意図をもって並べられているのか、繋がっているのかということを考えようとしたものです。そこには王権の問題が関わっているというのが、私の読みだったわけなので、いわばその繋がり背後に、語り手の王権に対する考え方というのがあるのだということを述べようとした論文です。

あるいは、平成十八年『説話の界域』という、これは若い人たちの論文を集めた本ですけども、その第一部に総論という形で、説話とはどういうものかということをお私書きましたが、そこにもちっとこれと関連するようなことを述べております<sup>(7)</sup>。

その後、『宇治拾遺物語』―「笑い」の語り方<sup>(8)</sup>という論文を小林保治先生監修の『中世文学の回廊』という本に載せました。これには注文があつて、一般読者に取っつきやすいような話を書いてくれとか、難しい論文風なものを書かないでくれというふうな注文があつたので、私は落語を引き合いに出して、『宇治拾遺物語』の笑

いがどういふふうに作られているかということを書きました。

つまり、その論文で私が言いたかったのは、かなり意図的に、作者が戦略的に笑いというものを語っているということです。結果的に笑いが生れるのではなくて、作者はいかに笑わせるかということを周到に考えて説話を組み立てているのだということ述べたいと思って書いたのです。今回の話もその一連の話ということになります。

要するに、『宇治拾遺物語』という作品の背後にある中世的な精神というものはどのようなものなのか。はたしてこれを中世的と、益田さんのように一気に、そこまで言っちゃっていいものかどうかという点で私はちょっと躊躇があるので、でも、何かその背後にある、時代的な精神なり何なりを、もう少し丁寧に読み取ってみたいと考えています。

時間が来たようですので、今日の私の話はここまでということにさせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。

## 注

(1) 益田勝実「中世的諷刺家のおもかげ——『宇治拾遺物語』の作者——」(『文学』昭和四十一年十二月。『益田勝実の仕事1』ちくま学芸文庫に再録)

(2) 三木紀人「背後の貴種たち——宇治拾遺物語第一〇話とその前後——」(『成蹊国文』七、昭和四十九年二月)

- (3) 小出素子「『宇治拾遺物語』の説話配列について―全巻にわたる連関表示の試み―」(『平安文学研究』六十七、昭和五十七年六月)
- (4) 野本東生「宇治拾遺物語第九話「大膳大夫以長前驅之間事」考」(『東京大学国文学論集』第4号、平成二十一年三月)
- (5) 西尾光一「宇治拾遺物語における連纂の文学」(『清泉女子大学紀要』三十一、昭和五十八年十二月)
- (6) 拙稿「王権のトボロジ―『古事談』第六亭宅篇試論―」(久保田淳編『論集中世の文学散文篇』所収、明治書院、平成六年七月)
- (7) 拙稿「総論」(小島孝之編『説話の界域』所収、笠間書院、平成十八年七月)
- (8) 拙稿「『宇治拾遺物語』―「笑い」の語り方」(小林保治監修『中世文学の廻廊』所収、勉誠出版、平成二十一年三月)

(付記)二〇一三年十月十二日の成城国文学会において同題で行った講演をもとに若干の加筆、削除を行ったものである。